

# 大学におけるラテン語教育

吉 田 聖

## はじめに

1990年は国連が定めた「国際識字年」、世界中の10億を超すといわれる文盲人口を減らそうという目的の下に統一行動を実施する年である。そのために教育活動は欠かせないものとなる。日本では小学校から表音文字であるローマ字を習い始め、外国語の文字に対する関心も高く、成人識字率は99%、中学校就学率92%、高等教育就学率30%である。最近、日本における「英語教育」は、幼稚園から外国人教師による英会話を教える所もあるくらい、加熱気味である。

この度、私の主な任務である「大学におけるラテン語教育について」、大学関係者から論文作成の要請があった。そこで、南山・名大・愛知大の三大学で過去15年間、ラテン語を担当した経験を踏まえて、<sup>(1)</sup>「大学でラテン語を学ぶ意義」をはじめ、「新しい学び方の模索」、「日本社会への貢献」等について、特に真の教育は「無知からの解放」と「誤謬からの解放」を目指すものであるという点に注目しながら、主に英語との関連で、この論文を作成することにした。

## I 大学でラテン語を学ぶ意義。

“Non scholae sed vitae discimus.” 「われわれは学校のためではなく、人生のために学ぶ」(Seneca BC3-AD65)。この言葉は、今日の「日本における教育」特に外国語教育のあり方についても、ぴったりあてはまる提

言ではなかろうか。

日本の中の中・高等学校までの「外国語教育」は、実はセネカの言葉とは裏腹に、生徒と一人ひとりの「人生のためではなく、学校（入試）のために」行われている、特に「大学受験」という枠組みの中で「受験英語」化し、文法・訳読・単語 5000 語程度以外は必要ない、という考え方だ。さらに、第二次世界大戦中「使用禁止」されていた英語が、終戦後わずか 45 年間で日本全国の大学入試科目となり、配点までが日本語より重要視されるまでに急変した。このような語学教育政策の豹変ぶりを不思議に思う者は少ない。「読み・書き・話す」という生きた言語の習得と活用という本来の外国語教育の目的から眺めると、日本における 6 年間の中学・高校の外国語教育は「受験英語」一辺倒であり、またその結果、語学嫌いの生徒を生み出しているとするれば、まことに残念である。

大学での 4 年間の外国語教育について考えてみると、学生は「受験英語」から解放されて、のびのびと「読み・書き・話す」、生きた語学能力を身につける時間もチャンスを大いにある。が、英語・フランス語・ドイツ語・イスパニア語等の担当教員の話を見ると、第一外国語（必修）はまだまじだが、第二外国語（選択）の学生となると、余り熱意を感じないらしい。バイトやクラブ活動で忙しく（？）勉強不足というより、やる気のなさが最大の理由ではなかろうか。

さらに卒業後の日本の社会を見渡してみても、中・高・大と 6-10 年もかけて学んだ英語の場合さえ、同じアジアの香港などと比べて見れば明らかのように、日本国内における英語の使用状況は均衡がとれていない。何故か。クワーク教授が指摘しているように、①「通常のコミュニケーション」の手段が日本語で十分間に合うのである。パイリングアルな TV ニュースは数本程度だ。②裁判所でも外国人のケースを除けば、公式用語として英語が使用されていない。③マス・コミや文学作品として、英語だけが使用されることは、まずない。英字新聞・英語の雑誌等は発行されているが、「受験英語」だけでは歯が立たないらしい。④たいていの娯楽番

組も、音楽番組を除けば、英語がナマで使われる機会も少ない。欧米の映画等も字幕スーパーや声優による「日本語吹き替え」が行われている！ ⑤日本の英語は、たまたま、選抜手段として、特に、大学の入試検定には不可欠の科目とされている。そこで、会話より文法・訳読重視の「受験英語」教育が盛んに行われているのである（「外語研紀要」第14号参照。愛知大学。1990年3月）

視点を変えてみよう。1990年度では、女子大生（短大生を含めて）が男子学生を上回り総数100万人を突破し、男女共学の大学がますます女子大生増大化の傾向を強め、さらに日本人の平均寿命も男子75.9歳、女子81.7歳と世界一長寿傾向を示してきている。「大学における外国語教育」はいろいろな国の言葉がわかり、話せる人間教育に励むべきであろう。①各人が国際社会に通用する人間となり、②父母共に語学に堪能な家庭・ホストファミリーづくりに励み、③引退後80歳代までの人生も、高齢化社会の国際交流と個人の趣味の幅を広げ、充実したものにするためである。大学時代に学ぶチャンスと時間があるうちに、英語はもちろん、フランス語・ドイツ語・スペイン語・イタリア語等の外国語学習にもっともっと力を入れる必要があろう。現代諸言語の語源的な基礎であるラテン語——後述する——もその際、四年間、随時選択履修可能なカリキュラムに改め、積極的な履修を促せば、「学校のためではなく、人生のために学ぶ」学生のために、計り知れない利益となるのではなかろうか。

そこで、現代諸言語の基礎であるラテン語を学ぶ意義について、もう少し考えてみよう。ラテン語は、2000年以上の歴史を持ち西欧諸国で通用してきた「国際語」であるが、日本では大学時代にしか学べない言語の一つで、しかもラテン語の講座がある大学も、そう多くはない。ラテン語は、英語も含め、フランス語・ドイツ語・スペイン語・イタリア語等の諸外国語と、語源的に非常に深い関連がある。即ち、インド・ヨーロッパ語族の一つであるラテン語は、ルーマニア語をはじめ、ポルトガル語・スペイン語・イタリア語・フランス語等の、いわゆる「ロマンス語」（ローマ人の言

語 *Linguae Romanae*)の源流なのである。従って、例えば標準語彙は約20万語ともいわれている現代英語や、無数にあるとも思われる現代語の語彙を系統たてずに、別々に学んだりするよりも、系統だてて同時に学ぶようにし、さらに並行してラテン語を学べば、語源と共に綴りの由来や諸言語の関連性を、より深く、より正確に、より豊富に把握出来るようになる。豊富な語彙こそ外国語習得・熟達な必須条件である。既習語を基礎に、未知の語学に興味のある人や将来、語学の教師になろうと思っている人だけでなく、一般学生も将来の国際社会人の教養として、ラテン語を大学時代に履修しておく意義は十分あると思う。

## II ラテン語の新しい学び方の模索。<sup>(2)</sup>

南山大学を中心に名古屋大学と愛知大学と、三つの大学でラテン語科目を週に4科目・7コマ、年間合計210コマ担当して15年になることは、既に述べたが、その間に、いろいろ試行錯誤を繰り返して、次第に自分らしい授業の組み立てが出来るようになった。文法書・辞書はもちろん使うが、文法書は基本的なことを簡潔にまとめたものに限る。初心者には、詳細に例外などを説明した分厚い本は、却って混乱をきたす。

「ラテン語－日本語」の辞典は、田中秀央『羅和辞典』、研究社、これ1冊のみである。「ラテン語－英語」の辞典類は、質量とも豊富で、学生向けの廉価で軽便なものもあり、1990度は、その中の1冊、LATIN－ENGLISH DICTIONARY、英語版(実は、ENGLISH－LATIN および便利な文法・活用表付)とアメリカの大学作成のカセット・テープも使用しているが、英語との関連がわかり学生には好評のようだ。

授業の進め方としては、単語や文法の暗記と詰め込み方式ではなく、種々資料のプリントを用意しながら、いろいろ工夫をこらしている。例えば、(1) Latin－English Prefixes & Suffixes [接頭語と接尾語:ラテン語・その一般的な意味・英語の実例の順に一覧表]を紹介する。

Latin—English Prefixes ラテン語—英語の接頭語

(ラテン語) Prefix	(一般的な意味) General Meaning	(例) Examples	_____の意味
[ ab-, a-, abs-	away, from, down	abduct, avert, <u>abstain</u>	さける。
[ ad-, ab-, ac-, af-, ag-, al-, an-, ap-, ar-, as-, at-, a-	to, at, toward, near	adduce, abbreviate, accept, affect, aggravate, announce, approximate, arrogate, assimilate, attempt, <u>ascribe</u>	~の原因を…… に帰する。
[ ante-, anti-	before, prior to, in front of	antecedent, antiquity, <u>anticipate</u>	先取りする,予 想する。
circum-	around, about, on both sides	circumnavigate, <u>circumspect</u>	用心深い
[ com- (cum), co-, col-, con-, cor-	together with, joint, equally, very	commission, composition, coequal, collect, <u>conduce</u> , correct, <u>council</u>	みちびく、貢献 する。
[ contra-, contro-	against, opposite	contradict, controversy, <u>countersign</u>	応答信号、合い ことば。
de-	down, off, away from, entirely, undo	<u>deduce</u> , depart, defect	結論に達する (推理により ……)
[ dis-, di-, dif-	separation, not, away, intensity, opposite	dismiss, <u>divert</u> , differ, dishonest	~をわきへそら す。
[ ex-, e-, ef-	out, out of, away from, former	exact, <u>erect</u> , effect	直立した、建て る。
[ extra-, extro-	outside, beyond	extraordinary, <u>extrovert</u>	外向性の(人)、 明るい(人)
[ in-, il-, im-, ir-	in, into, within, on, toward, very	induce, illusion, immanent, irrigate	内在する
[ in-, ig-, il-, im-, ir-	not, without, opposing	<u>inactive</u> , ignoble, illegal, <u>immature</u> , irregular	未熟な
inter-	between, among, reciprocal,	<u>intercept</u> , interact	インターセプト する、途中で押 さえる。
intra-	within, inside of	<u>intramural</u> , intravenous	校内の、大学内 の
intro-	into, within, inward	introduce, <u>introvent</u>	を内へ向ける。
[ ob-, o-, oc-, of-, op-	over, against, toward, vary, before, upon	<u>obviate</u> , omit, occasion, offer, opponent	取り除く。

(ラテン語) Prefix	(一般的な意味) General Meaning	(例) Examples	の意味	
per-	through, very	perfect, perform, <u>pervious</u>	(水・光などを)通す。	
post-	after, following, later, behind	postscript, postpone, <u>post-mortem</u>	検死、〔失敗した事柄についての〕事後の討議・分析。	
pre (prae-)	before (in time, place, or rank)	precede, <u>prejudice</u> , presentiment, <u>preside</u>	偏見、先入観	
preter (praeter)	past, beyond	pretermission, <u>preternatural</u>	超自然的な	
pro-	before, forward, for, in behalf, in place of, favoring	proclaim, produce, <u>procure</u> , prolong, pronoun, proslavery	気を配る。手に入れる。	
re-, red-	back, again	recede, reiterate, <u>redundant</u>	余分な。(あふれる)	
retro-	backward, back, behind	retroactive, retrograde, <u>retrospect</u> , <u>retrospective</u>	追想・回想、レトロの	
se-, sed-	away, aside, apart from	secede, secure, <u>sedition</u>	煽動・騒乱	
sub-, suc-, suf-, sug-, sum-, sup-, sur-, sus-, su-	under, beneath, below, inferior	substance, success, suffer, suggest, <u>summon</u> , suppress, surreptitious, suspense, suspect	呼び出す。	
	subter-	below, under	<u>subterfuge</u>	言いがれ。
	super-, sur-	over, above, on top, excessive	supersede, superscript, <u>supersonic</u> , survey	超音速の。
	trans-, tra-	across, beyond, over	transact, transcribe, <u>translucent</u> , traduce, tradition	半透明の
	ultra-	beyond, excessive, beyond the range of, extreme	ultraviolet, ultramodern, <u>ultramarine</u> , <u>ultrasonic</u>	群青(の)、海外(の)。可聴範囲外の。

Latin-English Suffixes ラテン語-英語の接尾語

Suffix	General Meaning	Latin Words	English Derivatives
-āceus	made of ; belonging to	crētāceus	cretāceous—— 白亜(質)の

(ラテン語) Suffix	(一般的な意味) General Meaning	(例) Examples	_____の意味
-ācea (n. pl.)	crustācea	crustācea(n)	甲殻類
--ālis	pertaining to ; like lēgālis	legal	法律の
-ānus	pertaining to ; belonging to to hūmānus	Roman human ; humane	ローマの 人間の
	subterrāneānus	subterrānean	地下の
	pertaining to ; belonging to ōrdinārius	ordinary	ふつうの
-ārium (n.)	nouns denoting place aviārium	aviary	鳥のおり
	aquārium	aquarium	水族館
-āris	pertaining to ; belonging to populāris	popular	人気のある
-āticus	pertaining to ; belonging to aquāticus	aquatic	水生の、水中に 住む
-icus	pūblicus	public	公の
-āticum (n.)	viāticum	viaticum	「臨終の聖体拝 領」旅行の給与 物
	foliāticum	fōliage	葉、群葉
-ātus (verbs)	(perfect passive participles changed to verbs in English) creātus	create	創造する cf. re-creatic
	nāvigātus	navigate	操縦する、航海 する
(adj.)	shaped like ; concerned with dentātus	dentate	歯のある
	privātus	private	個人に属する
(nouns)	one who lēgātus	legate	ローマ教皇特 使、使節
	office senātus	senate	上院(ローマ元 老院)
-āx(- ācis)	lendency to ; inclined to pūgnāx	pugnacious	けんか早い
+ -tās	abstract nouns of quality pūgnācītās	pugnacity	けんか好き。 { pugnus, i, m } { にぎりこぶし }

Suffix	General Meaning	Latin Words	English Derivatives
-bilis	able to be, capable of being ; inclined to	laudābilis	laudable—— 賞賛に値する
		visibilis	visible—— 目に見える
-brum	means ; place of action	vertebra (f.)	vertebra.—— セキツイ骨、背骨
-crum		fulcrum	fulcrum—— テコの支点、支え
-trum		rōstrum	rostrum—— 演壇(rostra)
-bulum	means ; place of action	vestibulum	vēstibule—— 玄関(公共の建物)
-culum		vehiculum	véhicle—— 乗物
-ulum		ridiculum	rīdicule—— あざ笑い
-ernus	pertaining to	modernus	modern—— 現代の
-urnus		nocturnus	nocturn(e)—— ノクターン・夜想曲
-erna (f.)		caverna	cávern—— 大洞窟、空洞
		taberna	tavern—— バー(酒場)
-ia	abstract nouns of quality	miseria	misery—— みじめさ。悲惨。
-tia		justitia	justice—— 正義
-ntia	(from base of pres. part.)	frequentia	frequence, -cy —— しばしば起こること。
-idus	possesing the quality of	timidus	timid—— おどおどした、臆病な
-ilis	pertaining to ; capable of being, able to be	puerilis	púerile—— 子供の、子供っぽい、未熟な
		civilis	civil—— 一般人の、民間の。
		facilis	facile—— たやすい
		ductilis	ductile—— 打ちのばせる、どんな形にもなる
-inus	pertaining to, like	marinus	marine—— 海の
		aquilinus	áquiline—— ワシの
-ienus		aliēnus	alien—— 外国(人)、別の
-ina (f.)	nouns	doctrīna	dōctrine—— 教義、主義



Suffix	General Meaning	Latin Words	English Derivatives
-iō (n.)+ present stem of verb	nouns of action ; state ; result of action	legiōn	legion———— 軍団
-io (n.)+ stem of perfect pass. part.	abstract nouns of action	actiōn— versiōn—	action———— アクション、行 動。 version———— 説明、(曲げられ たもの)
-ium	neuter nouns of place ; result of action	studium	study———— 勉強 (努力する こと)
-cium		aedificium	edifice———— 建物
-tium		hospitium	hospice———— ホスピス (旅人 の安息所)
		praemium collēgium	premium———— 賞金 (プレミア) college———— 大学 (仲間の集 まり)
ius	characterized by ; belonging to	varius anxious	various———— いろいろな anxious———— ~を心配してい る
-ivus	pertaining to ; tendency ; capable of	āctivus missivus	active———— 活動的な missive———— 手紙、公文書。
-lentus	full of ; disposed to	corpulentus	corpulent—— 太った。
-culus	implying smallness ; affection ;	articulus	article———— 品物、記事 etc.
-ellus	contempt ; diminutives	libellus	libel [lá:bl] — 誹毀 (ヒキ) 文 書。
-olus		gladiolus	gladiola———— グラディオオラス
-ulus		scrūpulus	scruple———— 良心のとがめ、 ためらい。
		fōrmula (f.) corpusculum (n.)	formula———— 式文、決り文句 cōpuscle———— 小体、血球。
-men	means ; action ; result of action	regimen specimen	régimen———— 養生規則、~計 画 spéciment—— 見本、実例。
-mentum	means ; result of action	regimentum	régiment—— 連隊、大群、大 勢

Suffix	General Meaning	Latin Words	English Derivatives
-mōnium	abstract nouns of action ; result of action	sānctimōnium	sānctimony—— 信心家ぶること、神聖らしく見せかける
-mōnia		ācrimōnia	acrimony—— きびしさ、しんらつさ
-nt-	(stem of present participle) relating to	diligent-	diligent—— 勤勉
		sentient-	sentient—— 感覚をもった、～の鋭い
-or + present stem of verb	abstract and collective nouns denoting action or condition	clāmor	clamor—— やかましい人の声、叫び声。
-or + stem of perfect pass. part.	denoting an agent	narrātor	narrator—— 語り手、ナレーター
-ōrius	pertaining to ;	auditōrius	auditory—— { cf. オーディション } { (audition) } 耳の、聴覚の
	belonging to	nōtōrius	notorious—— よく知られた
-ōrium (n.)	nouns denoting place	auditōrium	auditorium—— 講堂、公会堂
-ōsus	full of	factōrium	factory—— 工場、製造所
		verbōsus	verbōse—— ことばかずが多い、くどい
-ōx + -tās	tendency to ; inclined to ; abstract nouns of quality	ferōx	ferocious—— どうもうな、残忍な
		ferōcītās	ferocity—— どうもうさ、残忍さ
-tās	abstract and collective nouns denoting quality	gravītās	gravity—— 厳肅さ、重大さ、重さ
		libertās	liberty—— 自由、解放。
-tūdō	abstract nouns denoting quality	altitūdō	altitude—— 高さ、高度、標高

Suffix	General Meaning	Latin Words	English Derivatives
-tum	(neuter ending of perf. pass. part.) result of action ; completed act	factum habitum	fact———— 事実、現実 habit———— 習慣、くせ、→修道服
-tūra	result of action	captūra	capture———— 捕えること
-sūra		fissūra	fissure———— 岩や大地の深い裂け目
-ūra		figūra	figure———— 人・物の姿、人物 etc.
-tus	fouth declension nouns	adventus	advent———— 「待降節」、～到来。
-sus	identical in form with the perf. pass. part.	sēnsus	sense———— 感覚、認識力、センス。
-tūs	abstract nouns denoting quality	virtūs	virtue———— 美德、徳、美点
-us	second declension masculine adiective	barbarus sevērus	barbarous—— 残酷な、野蛮な sevère 厳格な、きびしい
-uus	belonging to	continuus assiduus	continuous—— 切れずに続いた assiduus—— 根気強い、勤勉な

PS. facsimile = fac + simile 「ファクシミリ」写真電送(複写): fax.  
 make similar one  
 = exact copy

これによって、ラテン語がどれほど英語に深い関連があるかわかり、英語の単語がどれほど有機的な結合をしているものかも、一目瞭然である。単語の構成上、重要な「語根」Roots についても適時、授業ではラテン語と英語を比較紹介している。

例えば、transportability という 16 文字の単語も分析してみれば、trans=beyond 越えて〔接頭語〕+port = to carry 運ぶ〔語根〕+ability = able + ty 可能性・能力があること〔接尾語〕からなっていて、意味も「輸送・運送可能なこと」だとわかる。スポーツ sports という単語も、同じく、

ラテン語 *porto* = *to carry* (運ぶ) の派生語 (英語には 25 ケ以上ある) の一つで、*disport* の短縮形に過ぎない。「語根」の例題は沢山あるが、紙面の都合で割愛する。ただ参考までに、南山大学卒業生・田代正雄氏著『語源中心英単語辞典』南雲堂、1986 年第 10 刷版は、100 の接頭語、118 の接尾語、そして 240 の語根が取り上げられている。一風変わっていて、面白く、役に立つ本なので推薦している。

(2) 日常生活に密着した種々の名称を紹介する。

今回は、紙面の都合で逐一紹介出来ないが、例えば、四季の名、12 ヶ月の名称の由来、7 曜日、時間の単位 (秒・分・時)、時間の数え方、ドレミの音階名の由来、CELSIOR<sup>(3)</sup>・CORONA・FAMILIA・GLORIA・INTEGRA・VIGOR (日本製の自動車名には、ラテン語に因んだものが多い!)、IPSA・LUX・PRIMA 等の商品名に見られるラテン語に由来するものを解説付でおりまぜながら、特に英語との関連で、ラテン語の基礎知識をひととおり紹介している。すると「ラテン語は死語だ」<sup>(4)</sup> などと聞かされてきた学生たちは意外な所に、いまま沢山ラテン語が使われていることに気付き、「ラテン語は死語だ」などという「誤謬から解放される」と同時に、語源としてのラテン語の幅広さに驚き、そして強い興味を示すようになる。<sup>(5)</sup>

(3) 格言等を紹介する。例えば、

“① Audi, ② vide, ③ tace, ④ si ⑤ vis ⑥ vivere ⑦ in ⑧ pace.” 「④もし、⑦⑧平和に、⑤⑥暮らしたければ、①聞きなさい! ②見なさい! ③黙りなさい!」(○印内の数字は、ラテン語と日本語を対応させるための便宜的な処置で、ふつう文中には付記しない)

2000 年前のローマ人の「生活の知恵」は、生きる指針として、今も有効である。おしゃべり好きな学生にとっては、ちょっと耳の痛い言葉かもしれないし、身につまされる教訓でもあろう。または、愛について、“① *Dif-ficile* ② *est* ③ *longum* ④ *subito* ⑤ *deponere* ⑥ *amorem*.” 「③長いこと続けた⑥愛を、④突然、⑤棄てることは①②難しい」ということばも、“① *Humanum* ② *est* ③ *amare*, ① *humanum* ④ *autem* ⑤ *ignoscere* ② *est*.” 「③

愛することは①②人間らしいことであり、⑤ゆるすことも、④また①人間らしいことだ」という格言と共に、学生の心に残るらしい。

格言類は、1年間に約100ヶ位教えるが、いずれも時代を超えた真理を述べているので、好評である。短く鋭い言葉だが、人生の大切なことを、辛口に表現したものなどに接すると、手帳に書き取って、友達に教えるという学生もいる。ここでは30ヶ、対訳の形で紹介しておこう。

ラテン語の格言等（坪井光雄『初歩のラテン語』大学書林より）

1. pāx vōbiscum !
2. et tū, Brūte !
3. spēs mea Christus.
4. tē deum laudāmus.
5. dominus illūminātiō mea.
6. id mihi ūtile est.
7. tū mihi sōla placēs.
8. hodiē mihi, crās tibi.
9. nōn sibi, sed patriae.
10. nēmō me impūnē lacessit.
11. meā virtūte mē involvō.
12. mē meae lātrant canēs.
13. sunt superis sua jūra.
14. timor mortis conturbat mē.
15. sua eum commendat modestia.
16. faciēs tua computat annōs.
17. ad suum quaestum callidus est.
18. sua mūnera mittit cum hāmō.
19. ego dignus sēdium patris mei.
20. ea sōla voluptās sōlāmenque mali.
21. nostra sine auxiliō fugiunt bona.

22. multi multa sciunt, sē autem nēmō.
23. ego dormiō et cor meum vigilat.
24. divitiae meae sunt, tū divitiārum es.
25. etiam capollus ūnus habet umbram suam.
26. cōnsortiō malōrum mē quoque malum facit.
27. meā culpā, meā culpā, meā māximā culpā.
28. homō doctus in sē semper divitiās habet.
29. est deus in nobis, et sunt commercia caeli.
30. est animus tibi, sunt mōrēs, est lingua fidēsque.

試訳：吉田担当。紙面の都合で、単語の文法的説明は省略。

1. 「平和が皆さんと共に！」(司教司式ミサ中の挨拶の言葉。通常は Dominus vobiscum)。
2. 「Brutus!お前もか！」(Caesar, 100-44 BC.) [BC 44 年、Caesar 暗殺事件で共謀者中に、彼の友人 Brutus までもがいたことを慨嘆した言葉]。
3. 「キリストは私の希望」(ラテン語の典礼聖歌)。
4. 「私達は神であるあなたを讃えます」(St. Ambrosius 作の讃歌「テ・デウム」冒頭の句)。
5. 「主は私の光」[詩篇 27, 1 : 「……私の救い、私は誰を恐れよう」と続く)。
6. それは私にとって役に立つ。
7. 「あなただけが私のお気に入り」(Ovidius, BC43-AD17)。
8. 「私には今日、あなたにはあした」(旧約聖書：シラ書 38, 22 [死者への哀悼の言葉より])
9. 「自分のためではなく、祖国のために」(Cicero)
10. 「誰も、害を受けなくて、私を襲うことは(出来)ない」(Scotland)。
11. 「私は私の力で自分を包む」(Horatius, BC65-8)。
12. 「私の犬どもが私に吠える」(Plautus, BC254-184)。

13. 「神々には彼らの法がある」(Ovidius, BC43-AD17)。
14. 「死の恐怖が私を乱す。」
15. 「彼の控え目が、彼を推薦する。」
16. 「あなたの顔はあなたの年を数える」(Juvenalis, AD60?-140)。
17. 「自分の儲けに対しては技目がない」(Plautus, BC254-184)。
18. 「釣針をつけて自分の贈物を贈る」(贈物には下心あり、の警句)。
19. 「私は私の父のイスに相応しい。」
20. 「それが彼の唯一のたのしみ、不幸の慰め」(Vergilius, BC70-19)。
21. 「我々の利益は、救いようなく、逃げていく」(Ovidius)「……花を集めよ！」と続く。
22. 「多くの人はいくつものことを知るが、自分のことを知らない」(St. Bernardus, 1090-1153)。
23. 「私は眠っていても、心は目覚めている。」
24. 「富は私に属し、あなたは富に属す」(Seneca, BC3-AD65)。
25. 「髪の毛一本でさえも、自分のかげを持つ」(Publius Syrus)。
26. 「悪人とのつきあいは、私をも悪人にする」(朱に交われば赤くなる、の意)。
27. 「これが過ちなり、これわが過ちなり、これわがいと大いなる過ちなり」(ラテン語のミサの最初の部分にある「告白の祈り」)。
28. 「教養のある人は常に自分自身の中に富を持つ」(Titus Phaedrus)。
29. 「私達のうちに神がおられ、天との交流がある」(Ovidius)。
30. 「あなたには勇気も、教養も、雄弁も、徳義もある」(Horatius)。

(4) 聖書の言葉。どの言語でもそうだが、聖書の言葉は、割合と平易であっても内容が深い。そこで日本語で知られている聖書の言葉、例えば「愛の掟」などを、英・仏・独・伊・西とラテン語でプリントにして、同時に紹介する。毎回1ヶ位、年間30ヶの聖書の言葉を教える。

a) Latin : QUIA IN IPSO CONDITA SUNT UNIVERSA IN CAELIS ET IN TERRA. (COL 1, 16)

〔注〕原文は DEO ではなく IPSO である。南山大学の標語、本稿Ⅲ、5 と比較。原文箇所は COL 1, 15 ではない。

日本語：天にあるものも地にあるものも、万物は御子において造られたからである。

英語： For in him were created all things in heaven and on earth.

仏語： Car en lui tout a été créé dans les cieux et sur la terre.

独語： Durch ihn ist alles geschaffen worden, was im Himmel und auf der Erde lebt.

伊語： Poiché per mezzo di lui sono state create tutte le cose, quelle nei cieli e quelle sulla terra.

西語： Por medio de él, Dios creó todo lo que hay en el cielo y en la tierra.

b) Latin : ① Diliges ② Dominum Deum tuum ③ ex toto corde tuo et ④ ex tota tua et ⑤ ex tota tua et ⑥ ex tota virtute tua. ⑦ Diliges ⑧ proximum tuum ⑨ tamquam teipsum. (Mc 12, 30 - 31 = Dt6, 4s ; Lv 19, 18)

日本語： ③心を尽くし、④精神を尽くし、⑤思いを尽くし、⑥力を尽くして、②あなたの神である主を①愛しなさい。⑧隣人を⑨自分のように⑦愛しなさい。

英語： You must love the Lord your God with your all your heart, with all your soul, with all your mind and with all your strength. You must love your neighbour as yourself.

仏語： Tu aimeras le Seigneur, ton Dieu, de tout ton coeur, de toute ton âme, de toute ta pensée et de toute ta force. Tu aimeras ton prochain comme toi-même.

独語： Liebt ihn von ganzem Herzen, mit ganzem Willen und ganzen Verstand und mit allen Kraeften ! Liebe deinen Mitmenschen wie dich selbst !



伊語： Amerai dunque il Signore Dio tuo con tutto il tuo cuore, con tutta la tua mente e con tutta la tua forza. Amerai il prossimo tuo come te stesso.

西語： Ama al Señor tu Dios con todo tu corazón, con toda tu alma, con toda tu mente y con todas tus fuerzas. Ama a tu projimo como a ti mismo.

(5) 音楽の導入。私の授業のユニークな点のひとつだと思う。ラテン語の歌詞については文法的な説明を加える。中等学校時代に、案外、AVE MARIA などラテン語の歌を習ってきた学生が沢山いて、初めて、一語一語、正確な意味が分かったと、懐かしさとともに知る喜びを味わう。この頃目について、後ほど詳述する。

### III 南山大学とラテン語

南山大学には、“HOMINIS DIGNITATI”——「人間の尊厳のために」という教育理念（モットー）をはじめ、その内容を表現したラテン語の文章がG棟ロビーに合計7つ掲げられている。ラテン語であるため、4年間在学していても、大学生にはあまり理解されず、知られていないようだが、教育の一面、即ち「無知からの解放」から「知ることの喜び」を体験するためにも、この際、文法的な説明を加えて紹介しておきたい。

#### 1. HOMINIS DIGNITATI

FOR HUMAN DIGNITY

「人間の尊厳のために」

Hominis = homo, hominis, comm.人間の（属格・単数）

Dignitati = dignitas, atis, f.尊厳・品位のために（与格・単数）

#### 2. PAX IN ORBE TERRARUM.「地上に平和あれ！」（あれ！に相当する動詞省略）

pax, pacis, f.平和が（主格・単数）； in=前置詞+奪格； orbe=orbis, is, m.円（奪・単）

terrarum=terra, ae, f.土地・土・国の（属・複）； in orbe terrarum :  
地球上に

3. [EGO SUM] VIA, VERITAS, VITA.「わたしは道、真理、生命で  
ある」（ヨハネ 14, 6）

ego=人称代名詞・1人称・主格・単数:わたしは……cf. egoism : 利己  
主義

sum=sum, esse, fui.動詞・現在・1人称・単数:[わたしは]……であ  
る。

via=via, viae, f.道（主格・単数）

veritas=veritas.atis, f.真理（主格・単数）

vita=vita, vitae, f.生命（主格・単数）

4. SPIRITUS EST QUI VIVIFICAT.「いかすものは霊である」（ヨハ  
ネ 6, 63）

spiritus=spiritus,us,m.微風、呼吸、息、霊。ここでは「霊」

est=sum 「である」の意味で。3人称・単数

qui=関係代名詞・男性・主格・単数。「霊」という単語との関連。

vivificat=vivifico, are, avi, atum.他動詞 「生かす」現在・3人称・  
単数。

5. IN DEO UNIVERSA SUNT CONDITA.「万物は神によって創造さ  
れた」（コロ 1, 16）

in=前置詞+奪格: 「によって、おいて」+Deo=Deus, i,m.神（奪格・  
単数）

universa=universus, a, um, adj.ここでは形容詞の名詞化。中性・主格・  
複数。万物は。

sunt condita=condo の受動態。過去。3人称・複数。創造された。

6. VITAM IMPENDERE VERO.「真実のために命をかけよ」

vitam=vita, ae, f.命を（対格・単数）

impendere=impendo, ere. pendi, pensum. 「費やす・使う」不定法・

現在。

vero=verum, i, n.真実に（与格・単数）

#### 7. LEX LIBERTATIS, LEX AMORIS.「自由の法は愛の法」=「愛こそは自由への道」

lex=lex, legis, f.方式、契約、規定、法律、法令、法。（主格・単数）

libertatis=libertas, atis, f.自由、解放の。（属格・単数）

amoris=amor, oris, m.愛の（属格・単数）

### IV カトリック教会とラテン語

1) 教会用語としてのラテン語に関する新聞記事（The Japan Times,1986年1月26日；1989年1月15日参照）から抜粋の形で紹介しておこう。

数世紀にわたって全世界の「カトリック教会を結ぶ絆」と呼ばれ、それ相当に尊重されてきたラテン語は、今や高位聖職者の間でさえ使われなくなってきた。ヴァチカンは今も重要文書をラテン語で発表しているが、教会の公式用語がラテン語であるというのは、もはや名目だけとなってきた。高位聖職者も、とりわけ枢機卿も含め、ラテン語を読めなくなっている。

かつてラテン語は欧米の神学校で「必修科目」であったが、今日では、選択科目となり、しかも6ヶ月（半期）履修科目となってきた。〔南山大学・文学部・神学科はこれまでラテン語を第一外国語としてきたが、近年、聖職者以外の学生にも門戸を解放し在籍を認めるようになった。そこで、彼らの便宜も考慮して、英語も第一外国語とする改革案が検討され1990年10月にその通り学則変更が教授会で承認された。これは筆者の長年の念願でもあった。〕

ヴァチカンのラテン語専門家たちは、現代用語もラテン語で表現できるように苦心惨憺しながら、例えば「エイズ」(syndrome comparati defectus immunitatis)をはじめ、「シガレット・ライター」(ignitabulum nicotianum)、「ウーマン・リブ運動」(modus femineus liberandes)、「航

空機ハイジャック」(*violenta aeronavigii abductio*)、「ナイト・ガウン」(*tunicula dormitoria*)、「ウィークエンド」(*extrema hebdomada fer-iata*)、「チェック・アップ(健康診断)」(*totius corporis inspectio*)、といった具合に種々の実用的な新造語をまとめた辞典発行計画も進行中である。にもかかわらず、ラテン語の公式使用は減少傾向にある。

この傾向は、第二ヴァチカン公会議(1962-1965)による広範囲にわたる教会内部改革と、現代適応化の結果によるものであり、ラテン語のかわりに、自国語でミサを捧げることが公式に認められ、諸秘跡も自国語で行われるようになった。

最初は、ローマの一地方の言葉であったラテン語は、アラマイ語を話したイエズスとその時代には「ローマ帝国の公用語」であった。十二使徒時代からミサはラテン語で捧げられ、ラテン語は次第に「西方教会の公用語」となり、特に神学的な著作において、頻繁に用いられた。

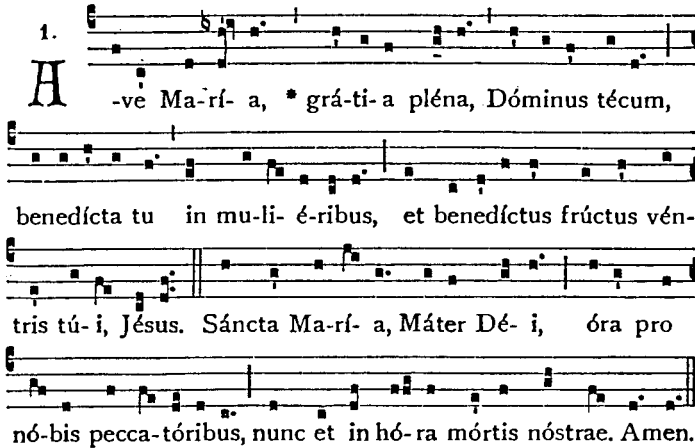
Reginaldo Foster 師(教皇の公文書作成・ラテン語版担当官。7人の一人)は言う。今日、ヴァチカンの Synodus(司教会議)に参加する若い司教たちは、65歳位の秘書を同伴し、自分の発表する文書等をラテン語になおしてもらっている。大神学生も今やラテン語に余り興味を示さなくなってきた。しかし教会は、志願者の激減をおそれてか、ラテン語に無頓着な学生に対して、あまり厳しい態度を取らなくなったことも確かである。しかし「将来、司教となっても、ラテン語の知識がないということは、過去2000年におよぶカトリック教会のすばらしい宝庫に触れる機会が全くないということで、これは非常に残念なことである」と彼は述べている。

換言すれば、今の大神学生たちは、「外国語を知らないで、外国の歴史や文化、文学や思想を勉強しようとしている」ようなものである。

2) ラテン語で、日本人に最も親しまれている教会音楽といえば、AVE MARIA ではないだろうか。しかし、意味が分からずに、歌ったりするのは鸚鵡やインコの物真似と大差ない。それよりも、意味が分かって、歌ったりするほうが、はるかに人間的だと思う。そこで、この曲について、逐

語的に文法的説明を加えてみたい。実際に、授業のときには、クレゴリオ聖歌、グノー、シューベルト、アルカデルト、モーツァルト等、数曲持参して「聞きくらべ」もする。ここでは、紙面の都合上、クレゴリオ聖歌の音譜のみを紹介することにとどめたい。

Ave Maria. \*

1. 

**A** -ve Ma-rí- a, \* grá-ti- a pléna, Dóminus técum,  
 benedícta tu in mu-li- é-ribus, et benedíctus frúctus vén-  
 tris tú- i, Jésus. Sáncta Ma-rí- a, Máter Dé- i, óra pro  
 nó-bis pecca-tóribus, nunc et in hó- ra mórtis nóstrae. Amen.

- 1. Ave = aveo, ēre, imperative. “Ave Maria”. 「天使祝詞」よろこそ、おめでとう!
- 2. Maria = Maria, ae, f. Voc. Sg. with imper. マリアよ
- 3. gratia = gratia, ae, f. Abl. Sg. めぐみに
- 4. plena = plenus, a, um, adj. f. Abl. Sg. みちている
- 5. Dominus = Dominus, i, m. Nom. Sg. 主 (the Lord) は
- 6. tecum = te + cum, cum = prep. + Abl. te = tu, tui, pron. pers. Abl. Sg. あなたと共に
- 7. benedicta = bene + dictus, a, um, p. p. (benedico, ere) f, Nom. Sg. 祝福されている
- 8. tu = cf. 6. Nom. Sg. あなたは
- 9. in murielibus = mulier, eris. f. Abl. Pl. in = prep. + Abl. 女のうちに
- 10. et = conj. = and

- 〔 11. benedictus = cf. 7. m. Nom. Sg.祝福されている
- 〔 12. fructus = fructus, us, m. Nom. Sg. 実→胎児
- 〔 13. ventris = venter, tris, m. Gen. Sg.腹
- 〔 14. tui = tuus, a, um, adj. pron. poss. m, Gen. Sg.あなたの
- 15. Jesus = Jesus, Jesu, m. Nom. Sg.イエズス,fructus と同格。
- 〔 16. sancta = sanctus, a, um, adj. f. Voc. Sg. (p. p. sancio, ire)聖なる
- 〔 17. Mria = cf. 2.マリア (よ)
- 〔 18. Mater = Mater, Matris, f. Voc. Sg.母 (よ)
- 〔 19. Dei = Deus, i, m. Gen. Sg.神の
- 〔 20. ora = oro, are, avi, atum, imper. 2sg.祈って下さい！
- 〔 21. pro nobis = nos, nostrum, pron. pers. Abl. Pl. pro = prep. + Abl.  
for us.わたしたちのために
- 22. peccatoribus = peccator, oris, m. Abl. Pl.つみびと, nobis と同格。
- 23. nunc = adv. “now”
- 24. et = conj. “and”
- 〔 25. in hora = hora, ae, f. Abl. Sg. in = prep. + Abl. at the hour  
…時に
- 〔 26. mortis = mors, mortis, f. Gen. Sg.死の
- 27. nostrae = noster, nostra, nostrum, pro. poss. f. Gen. Sg. わたし  
たちの
- 28. Amen = (Hebr.) indecl. int. “so be it !”, truly, certainly.アーメン。

① 天使祝詞 (Ave Maria という祈り。前半は聖書：ルカ 1, 28-42 参照)：品詞分解は前頁参照。

Ave Maria, gratia plena, Dominus tecum, benedicta tu in mulieribus, et benedictus fructus ventris tui, Jesus. 現行の日本語 (文語体) ではつぎのとおり。

「めでたし、聖寵満ちみてるマリア、主おんみと共にまします。おんみは女のうちにて祝せられ、ご胎内のおん子イエズスも祝せられたもう。」

(後半は教会作成の祈り) : Sancta Maria, Mater Dei, ora pro nobis peccatoribus, nunc et in hora mortis nostrae. Amen.

「天主のおん聖母マリア、罪びとなる我等のために、今も、いつも、臨終の時も祈りたまえ。アーメン。」

## ② 英語の天使祝詞

Hail Mary, full of grace. The Lord is with thee. Blessed art thou amongst women, and blessed is the fruit of the womb, Jesus.

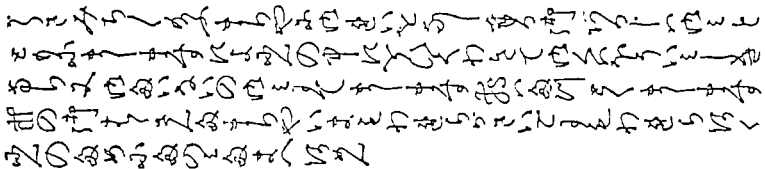
Holy Mary, mother of God, pray for us sinners, now and at the hour of our death. Amen.

## ③ ドチリナ・キリシタン (1592年、1600年) による天使祝詞。

ラテン語 (ポルトガル語) が翻訳されずに、そのまま、かな書きにされている箇所がいくつもあって、興味深い。原文は次のとおり。下線部分がラテン語 (ポルトガル語) に由来すると思われる箇所。

1) 原文 (カサナテンセ本参照)

かきかき



2) 読み方。(パチカン本参照)

がらさみちみち給ふまりあに御れいをなし奉る 御主 (おんあるじ) は御身と共に御座 (まし) ます によにんの中にをいて べねぢいたにて わたらせ給ふ 又御 (ご) たひなひの御実 (おんみ) にて御座 (まし)

ます ぜすすは べねぢいとにて 御座(まし)ます でうすの御母さん  
たまりあ 今も 我等がさいごにも 我等悪人の為に 頼みたまへ あ  
めん。

3) 解説。

がらさ=gratia, ae, f.恵み。細川がらさ夫人もこの単語に関連。

まりあ=Maria, ae, f.固有名詞。「マリア」

べねぢいた=benedicta に対応。「祝せられ」の意で、女性形。

ぜすす=Jesus, us, m.に対応。カサナテンセ本では、組み合わせ文字を  
使用。

べねぢいと=benedictus に対応。「祝せられ」の意で、ここでは男性形。

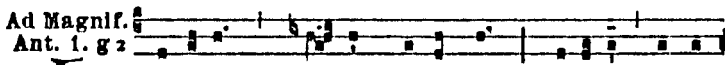
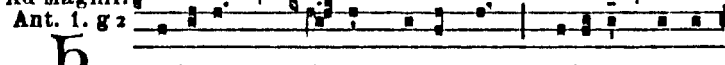
でうす=Deus, i, m.神。カサナテンセ本では、組み合わせ文字を使用。

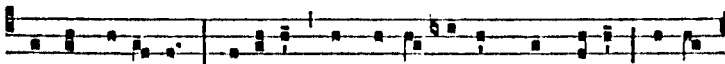
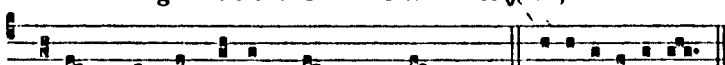
さんたまりあ=Sancta Maria「聖マリア」に対応。

あめん=Amen,ヘブライ語(不変化語)「アーメン」に対応。

V 日本社会への貢献。

1) 事実。CBC・TV コマーシャルの中で、場違いな使われ方をしてい  
た「ラテン語のクリスマス聖歌」(グレゴリオ聖歌音譜付で紹介。)

Ad Magnif.   
Ant. 1. g 2 

**h** Odi-e \* Chrí-stus ná-tus est : hódi-e Salvá-  
  
 tor appáru- it : hódi-e in térra cánunt Ange-li, laetán-  
  
 tur Archánge-li : hódi-e exsúl-tant jústi, di-céntes :  
  
 Gló-ri-a in excélsis Dé-o, alle-lú-ia. E u o u a e.



(*Liber Usualis*, p. 413, 12月25日の「夕の祈り」、福音の歌の「交唱」部分。コマーシャルには2段目☆印まで使用され、その後化粧品のPRに移り、「商品名」が続いて放送された。)

2) 対処。1988年1月20日、CBCテレビ番組の途中で流された「メナード化粧品」の広告には、上記のクリスマス曲が使用されていたので、次のような文書を関係者に送付し、善処を求めた。

前略。メナード広告担当責任者の方へ。

メナード広告(昭和63年1月20日〔水〕CBC・TVの8時半頃放映)についてお知らせします。この広告に使われているボーイ・ソプラノの歌声は歌声としては美しいのですが、クリスマスの歌ですから、岩下志麻さんとかぶせて使うのは、おかしいと思います。歌詞はラテン語ですから、一般にはわからないかも知れませんが、同僚の大学教員(外国人教授)たちも、おかしく思っています。なるべく早く、この広告は使わないようにして下さるよう、お知らせしておきます。

ちなみに、〔コマーシャルに〕使われている部分のラテン語の歌詞は、つぎのような意味です。

Hodie Christus natus est—

きょう キリストは お生まれになった

Hodie Salvator apparuit—

きょう 救い主が お現れになった

Hodie in terra canunt Angeli—

きょう 地において 歌うなり 天使たちは

実は、わたしもこのCDを持ってしまして、大学の授業(ラテン語担当)で、学生たちに、昨年12月頃聞かせました。とても清純な感じがしてメロディーだけ(歌詞の意味がわからなくても)聞いても、きれいだと好評でした。

メナードのイメージにあうのではとお考えかも知れませんが、宗教曲でしかも歌われる時期がクリスマスに限定されるものは、使用をさし控えられたほうがよいと思います。

1988年1月20日

南山大学文学部  
ラテン語担当 吉田 聖

3) 反応。この提言に対して、約1月後、電話連絡が入り、2月22日関係者2名(M氏とN氏)と面談することになった。当日、彼らが持参した文書は以下の通りであった。(原文のまま)

拝啓。弊社のTVコマーシャル(化粧品エンベリエ)に使用しました音楽につきまして先生より誠に丁寧なお手紙を頂戴し深く感謝しております。

CBCよりの転送及び制作会社(東京電通映画社)との見解協議に手間取りご返事が遅延し申し訳ありません。弊社といたしましては、先生よりのお手紙を拝見し今更ながら広告作品の扱いについて十分なる注意を図るべき点について反省いたしておりますが、ここに今回弊社がこのグレゴリオ聖歌につきまして使用した趣旨をご説明致したく申し上げます。

今回のTVコマーシャルでは弊社の最高級基礎化粧品「エンベリエ」のイメージを〈美のめざめ〉として訴えようと広告代理店・電通名古屋支社、制作会社・東京電通映画社との共同企画によって美しさの誕生を感動的に画と音で表現していきたいと考え制作したものです。

映像におきましては、阿蘇(熊本)・米塚の朝の夜明けをとらえ、音楽におきましては最もイメージにあう曲を多大なレコードライブラリーより選びだし現在使用していますグレゴリオ聖歌「今日キリストは生まれたもうた」を発見したしだいです。

弊社としましては題名が「今日……」とあることよりクリスマス近くに

歌われる曲であろうことは推察できましたが、同じような意味あいと思われる「聖しこの夜」のように12月のクリスマスと心理的に一般化されているものではなく、美しさのめざめ・誕生が音楽の美しさと感動で伝えられるものと企画しました。使用しましたレコードは木の十字架合唱団でしてこの合唱団はこの聖歌の美しさを全世界の人々に伝えるべく公演されているときき、またレコードとして発売されているのも現在、日本でクリスマスという時期を超越してその美しさと感動を訴えられるものと考えました。

ただ、弊社としてましては、作品が聖歌であることによりその使用につきましては、①画をおちついた格調高いものにする ②演奏者については世界の一流アーティストのものを使う ③曲本来のイメージを損なわないよう一部編集するような使い方はしないなど十分配慮しました。

以上が、今回のこのグレゴリオ聖歌を弊社テレビコマーシャルに使用した経緯であります。この説明が先生のご指導に十分おこたえしたものであるとは思われますがここに弊社が使用した主旨へのご理解頂きたく書面をしたためた次第です。

尚、CM 放映期間については、社内検討し、夏から秋にかけてはできるだけさけるべく考えております。弊社としてましては今後楽曲の選択にはさらに注意をほどこしていく所存ですが、ここにとり急ぎご報告と謝意を申し上げます。

敬 具

メナード化粧品宣伝企画課  
共同企画社 電通名古屋支社  
東京電通映画社

4) 評論。この趣旨書について。曲目の美しさを利用することのみを強調し、宗教曲(即ち、祈り)に対する心遣いが欠落している点で、粗野な説明に過ぎず、この主旨書の説明には、必ずしも納得したわけではない。

しかし、一応、誠意をもって回答を試みた点だけは評価しておきたい。その後、このTV コマーシャルはすぐには放映中止にはならなかったが、おそらく契約期間終了時点で、続行は見合わせることにしたらしく、夏までにはやめますからという言葉どおり、その年の夏頃には、放映されなくなった。

## あとがき

大学におけるラテン語教育という、非常に限られた立場から、過去の試行錯誤の中から、具体例を交えて述べてきた。終わりにあたり、一言すれば、「無知からの解放」、および「誤謬からの解放」の両面から行われる真の「教育活動」は、なにも大学生に対してだけでなく、日本の社会に対しても、世界に対しても行わなければならない、と思う。ラテン語という言葉そのものは、大学時代にしか学べないものであり、また学んでも、将来、会社などでの利用度は99.9%ないかも知れない。

しかし、現代諸言語を今後ますます必要としてくる日本の状況を考慮に入れると、特に、なんでも「国際化！」と叫んでいる、いわゆる掛け声だけは盛んな「経済大国日本」が、真に国際社会で人々から尊敬され正しく評価されるためには、人間の共通の営みで、しかも政治・経済・文化・社会の根底にある「宗教的なもの」（例えばグレゴリオ聖歌など）を日本人が正しく理解し、尊重する心が不可欠である。

日本人の大半は仏教徒であることを自認しているが、自分の信仰や宗教上の実践に関しては、非常に曖昧である。例えば、キリスト信者でもないのに結婚式だけはカトリック教会で挙げるという風に鷹揚である反面、他の国々の（人々の）宗教に対する感受性や礼儀の点では、極めて鈍感で、欧州の聖堂を見物に出掛けて、衣装の点で礼を欠き注意されたり入場拒否されて、むくれるケースも見受けられる、という。

たかがTV コマーシャルくらいで、何も放映中止の要請までやる必要はないと、本稿Vの紹介記事を読んで、自分なら笑って済みますよ、という人

もいるかも知れない。が、教祖を揶揄したかどで「悪魔の詩」の作者に暗殺命令が下されるような、過激な宗教もあることを忘れてはならない。日本人のTVコマーシャル作成者だけでなく、日本人一般の「宗教的センス」が、これを機会に一層洗練され、鋭敏なものにあるように期待して、自分の専門的なラテン語(と教会音楽)の知識の信仰上の立場から、「グレゴリオ聖歌の場違いな使い方」に対して関係者に文書を提出し、敢えて善処を求めた次第である。

## 註

(1)担当科目：1990年度〔1回90分授業〕210回の授業内訳はつぎのとおり。

1. 「ラテン語・初歩」前期〔月1〕；後期〔水2〕；半期完結、合計30回  
名古屋大学・教養部・医進課程・2年次生。
2. 「ラテン語・古典語」通年〔火3〕=30回  
愛知大学〔豊橋〕・文学部・共通選択科目・3-4年次生以上。
3. 「ラテン語I」通年〔木34〕=30回  
南山大学・文学部解説共通自由科目・全学部・全学年次生。
4. 「ラテン語・神学科」通年〔月56・水12・木56・金12〕=120回  
南山大学・文学部・神学科・1年次生・必修科目。

(2)ラテン語学習のコツ。

### 1. 「解剖分析」=語尾をつかめ！

- a) 文章の構文の判別。〔①SV；②SVM；③SVC；④SVO；⑤SVOM；⑥SVOO；⑦SVOC等〕。

S=主語、V=動詞、M=副詞的修飾句、O=目的語、C=補語。

文中より①先ず「動詞」を、②次に主語を見分ける。

その他の語は関連語ごとに、まとめて理解する。

- b) 一つ一つの単語の分析：八つの品詞特定。

〔名詞・形容詞・代名詞・動詞〕=語尾変化・活用するもの(4つ)

〔副詞・前置詞・接続詞・間投詞〕=不変化語(4つ)。数詞は形容詞と見做す。

定冠詞はない。ラテン語は特に「語尾」が大切。語尾に、有力な情報が含まれている。

### 2. 暗記=反復練習！

言葉は覚えなければ、使いものにならない。最低限の文法と単語を、理解して〔既習得外国語、例えば英・仏・独・伊・西語と関連づけて〕覚えること。歌や文章にして覚えると忘れにくいらしい。とにかく暗記のコツは一つしかない。五感をフル

に働かせて目でみて、耳で聞いて、口で発音して、手で書いて、言葉の持ち味や響きなどを、味わいながら**反復練習**することだ。〔それには、母親がわが子に繰り返し、繰り返し、言葉を教える時のように、①忍耐と②希望と③愛情が必要だ……Mother Tongue「母語」という所以であろう。〕

以上のことを、ラテン語では短く、たった4語で、次のように言う。

① Repetitio    ② est    ③ mater    ④ studiorum.

語順：①反復は……③母②なり……④学習の

(さらに、末尾に ⑤ et ⑥ stultorum〔⑤そして、⑥愚か者の〕を追加すると、学生には辛口の冗談になる、とドイツ人の同僚が教えてくれた。)

別なラテン語の格言も、8語で、同じことを示している。

① Gutta    ② cavat    ③ lapidem    ④ non    ⑤ vi,  
⑥ sed    ⑦ saepe    ⑧ cadendo. (Gariopotus)

訳順：①水滴は、⑤力によって、④⑥ではなく、⑦たびたび、⑧落ちることによって、③石に、②穴をあける。

日本風に端的に言えば、「**点滴石を穿つ**」ということだ。

ドイツ語：Steter Tropfen höhlt den Stein.

(3) トヨタ自動車の新車「セルシオ」CELSIOR の命名にちなんで。

1989年10月9日から、トヨタ自動車は高級大型乗用車「セルシオ」を全国で売り出した。これは9月から米国で売り出した「レクサス」の国内版。ラテン語で「至上、最高」を表す「セルサス」CELSUS から名付けられた。

実は、もう10年位前のことだが、ある日研究室にいた私のもとに、電話がかかってきた。トヨタ自動車企画部の方からだった。用件は、ラテン語の単語の発音、響き具合、意味内容等についての、問い合わせであった。その時、いくつか持ち出された単語の中に、ELUCEO (動詞・1人称・単数形) という単語があったことは、今もはっきりと覚えている。回答として、e(=from) + lux(light)の構成から、①中から光が輝き出る、②目立つ、③秀でる、といった意味になり、発音も「エルーケオ」または「エルーチェオ」、「エルーセオ」となる旨、伝えたのである。その時、今回の新車名 CELSIOR についても、言及されたかどうか記憶に残っていないが、CELSIOR は celsus, a, um. という形容詞〔①上向いた、そびえる、高い、②隆起した、③気高い、度量の大きい、④意気高い、勇敢な、を意味する〕の比較級形であり、cello (秀でる) という動詞の過去分詞形から作られたものである。

電話での回答が一段落したところで、先方が「どうも有り難うございました……」と電話を切ろうとしたので、私は「また新車が出るのですか?」と尋ねた。先方は「いやそれはちょっと企業秘密ですので……」と口籠もった。それから、8年程経過した1989年10月、最高級車 CELSIOR (価格も450-620万円也!)の登場となったわけである!

ちなみに、ライバルの日産自動車もほぼ同時に超高級車「インフィニティ」IN-

FINITI を売り出し、ベンツ、BMW などの人気を集めている外国製高級車に真向から対抗しようという作戦に出た。この INFINITI も、ラテン語 *infinitus*, a, um. という形容詞〔①限定されない、無限の、②不定の、を意味する〕から作られたもので、語尾の形はラテン語でも格変化の一つとして、そのまま使っているものである。

- (4) 「ラテン語は死語だ」とよく言われる。確かに今どき、どこを見渡してもラテン語で日常会話がなされている場所など見当たらない。今日の現代語との関連も、少なそうに見えるために(ただ語源的な知識不足による場合が多いが)、ラテン語そのものまでもが死語だと思いがちである。

ところで、「親はその子供の中に生きている」と言えるのであれば、ラテン語は今日でも現代諸言語の中に、立派に生きている、と言える。何故なら、全世界人口 50 億人の約 8 分の 1 に相当する人々(6 億 2500 万人)がラテン語を「親」にもつ言語、すなわちイタリア語・フランス語・スペイン語・ポルトガル語・ルーマニア語等、いわゆる「ロマンス語」を使っているからである。

ラテン語そのものの起源は、前 1 世紀頃イタリア全土で話されていた他の言語と並んで、Latium 地方(ティレニア海とアペニン山脈の間に位置する中央イタリア地域)で用いられていた「一方言」からである。そのラテン語が当時約 2000 万人の使用言語にまで盛んになったのは、その Latium 地方に属するローマ市が次第にイタリア全土をはじめ、地中海諸国へと政治的な勢力を拡大していったためである。

ローマ市の起源は前 753 年と言われるが、最古のラテン語記録は前 500 年頃までで、文学として初めて登場するのは前 240 年、Livius Andronicus からで、ラテン語の歴史はそんなに古くはない。ラテン語が盛んになったのは、Augustus 帝の時代である。彼は Julius Caesar の養子であったが、Caesar の暗殺後、最初のローマ皇帝となった。この Augustus 帝のもとに、ローマ帝国はイギリスからアラビアまでを支配するに至ったが、5 世紀頃、この広大なローマ帝国もゲルマン民族の攻撃を受けて崩壊をはじめ、同時にラテン語の「子供たち」も生まれた。ラテン語は当時も話されてはいたが、ローマの中央集権的な権威にかけりが見え始めると同時に、種々の地方言語も発展し、上述のロマンス語と言われる諸言語になっていった。

英語はロマンス語ではないが、ラテン語の「こども」と見做されうるのである。実に約 60% の語彙は究極的にはラテン語に由来しているからである。(Gregory A. Staley, *LATIN*, University of Maryland, 1989 参照)

- (5) 三つの大学の「ラテン語」受講生の感想文

その①南山大：「ついに無遅刻・無欠席を通した授業はこのラテン語ともう一つだけという有様でした。進学先が南山大に決まったとき『ラテン語をやるんだ!』という決心をしました。そしてこの授業は私を裏切らなかったのです。聖書の句・金言・音楽・脱線話(エピソード)など、すべて楽しみました。……クリスマス・イブに神学院聖堂でラテン語の聖歌を歌いましたが、この授業のおかげで、とくに苦勞もしないで済みました。この授業を受けて本当によかったと思います。これこ

そ教養だと思ったのです。

『ラテン語やって何の役に立つの?』と言われるたびに、『それは愚問だ!』といつも言い返してきました。大学に入って1年目で、これ以上たのしんだ授業はありません。私は宝の山をぶち当てた気分でこれを書いています。来年からは多分取ることが出来ないと思いますが、暇があったら本を読み返してみようと思います。)(南山大・人類学科・1年・女子)

その②名古屋大学:「ラテン語にも日常会話があるということは面白かったです。例えば、Da quæso arabicam! (Coffee, please! コーヒー下さい!)とか、Benignè dicis (Its kind of you to say that.それはご親切に、どうも!)とか。英語を知らない(もしくは得意ではない)人々でも、ラテン語で通じる場合が実際にあるそうです。特にこの授業で習った解剖学用語は、日本語、英語ではほとんど通用しないため、西独ではラテン語か独語を使用しているそうです。日常会話においても、英語圏以外では、英語よりラテン語のほうが通じるかもしれません。今日の授業の“De profundis”(アルボ・ペールト作曲)は楽しく聴かせて頂きました。詩の短いわりには長い曲だと思いましたが、非常に美しい音で、流れのある曲だったと思います。)(名古屋大学・教養部・2年・男子)

その③愛知大学:「ラテン語は愛知大学では、古典語というジャンルに含まれていますが、意外なほど身の回りで使われているのには驚きました。CelsioやFamiliaなどの自動車名もさることながら、Verno、Valorとかいう会社名もラテン語からきていることを発見しました。ラテン語を知らない人よりは、いろいろな意味が理解出来たというのは、得であった。ラテン語で命名する人々は、その意味のよさで採用するのだろうが、それでもラテン語が多く使われるのは、その響きにも魅力があるからだろうと思います。

英語の語源がほとんどラテン語からきていることを知り、とても面白いと思いました。いつかローマの町を訪れてみたくなりました。ラテン語を通して、当時のローマの風俗習慣・歴史や文化に興味を持ちました。そして、なによりラテン語の歌、Ave MariaとかAve verum Corpusなど、聞き慣れた音楽が大好きになりました。

ラテン語は難しいですが、ただ文法だけでなく、イソップ物語や格言などを使うと、楽しく学習することが出来ます。同じことばを何度か辞書(ラテン語-英語)で引くうちに覚えていくし、少しづつですが難しさを感じなくなればいいなと思っています。)(愛知大学・文学部・3年・女子)

その④: Evaluation papers; (1988年度南山大学・文学部・神学科ラテン語履修者8名)より。7項目の「アンケート形式」5段階評価は下記の通り(%で表示)項目と評価(5=非常に良い。4=良い。3=普通。2=やや良くない。)

1. 教科書「ラテン語の学び方」 : 5 (12.5%); 4 (62.5%); 3 (25%); 2 (12.5%)
2. 単語帳「ラテン語基礎 1500語」 : 5 (0%); 4 (25%); 3 (62.5%); 2



(12.5%)

3. 辞書：田中著「羅和辞典」 : 5 (25%) ; 4 (62.5%) ; 3 (12.5%)
4. 聖書：「毎日の黙想ハンド」 : 5 (62.5%) ; 4 (37.5%)
5. 種々の資料（プリント配付） : 5 (25%) ; 4 (50%) ; 3 (25%)
6. 教会音楽鑑賞について : 5 (87.5%) ; 4 (12.5%)
7. エピソード等 : 5 (87.5%) ; 4 (12.5%)

PS.上記の評価を参考にして、次年度(1989年度)は一部授業内容の改善を図ることにした。

1. 上記の5 + 4 = 25%と評価点が50%だった不評の項目(2. 単語帳)については、次年度より、採用中止とする(理由①内容貧弱。②個人使用にもあまり役立たない。)
  2. 近刊「古代ローマについて」(小冊子:500円程度)を新規採用。カラー写真豊富な説明書で、ローマ時代についても、その歴史・文化背景等を学ぶことにする。
  3. 「教会音楽等鑑賞」。4 - 6 - 7項目が大好評(4 + 5 = 100%)だったので、続行する。
- その他：①途中45分経過後の小休憩は気分転換になり、よかった。  
②授業は、内容豊富で一定の順序で進められ、たのしかった。  
③単語・文法の丸暗記でなく、和訳中心でよかった、など。

## Latin Language Education at the University Level

Kiyoshi YOSHIDA

Drawing mainly on my experience of teaching Latin for 15 years at Nanzan, Nagoya, and Aichi University, I have presented some thoughts about the value of studying Latin in the context of a university education which, traditionally, aims at the liberation from ignorance and error. The following three points have been emphasized:

1. *The Importance of studying Latin at the University.* Latin has played a pivotal role as an international language in the Roman Empire. At present, Latin is still important not only as the source of many technical terms in the academic sciences, but also because of the fact that many European languages are connected with Latin either by common linguistic roots or by loan words. Studying Latin parallel with such a language will facilitate language learning because the resulting cross-reference enables the student to see various connections and build up a rich vocabulary.

2. *Looking for New Ways of Learning Latin.* According to my experience, teaching Latin to Japanese students by pointing out inner connections with English furthers both understanding and interest. Specific examples are tables of prefixes and suffixes ; words used in daily conversation such as the names of the months but also names of automobiles (CELSIOR, CORONA, FAMILIA, GLORIA) and other merchandise (IPSA, LUX, PRIMA) ; proverbs (Audi, vide, tace, si vis

vivere in pace) ; passages from the Scripture ; comparison of Gregorian hymns with their transliteration in early Japanese Christian literature, and Latin texts of religious music (Ave Maria) in versions by several composers.

3. *Contribution to the Enlightenment of Japanese Society.* As a specific example, I have described my negotiations with an advertising company over their use of the Gregorian “Hodie Christus Natus Est” in a TV commercial. I have advised the responsible person to withdraw the commercial ; discontinuing the unthinking misuse of Gregorian Chant will contribute to a general improvement of the religious sense of the Japanese people.